

修 士 論 文 要 旨

学籍番号 22GH101 第 号 氏名 浅野 溪

人文社会科学専攻 (コース: 文化芸術)

論文題目

東北北部地域における縄文・弥生時代移行期の石器石材消費戦略—津軽平野地域を中心に—

津軽平野地域では、約2300年前の弥生時代前期末葉に水稻農耕が導入されて以降、狩猟採集文化が変容していった。土器型式や生業、居住形態、社会構造の変化が指摘されている一方、石を打ち割って製作される剥片石器は、縄文時代から石材や器種で変化が認められず、「縄文的」と評価されてきた。しかし、そのような評価は実物資料の詳細な観察や基礎的な分析を経てなされたものではなく、当該期の文化・社会論のなかで正確に位置づけられてきたとは言い難い。したがって本研究の目的は、東北北部地域の縄文・弥生時代移行期にかけての剥片石器群の技術構造や石材資源環境、居住・生業との関係態を分析し、石材資源の消費戦略を明らかにすることで、当該地域の社会・文化論を新たな視点から追究することを目的とする。

本研究の方法は、まず津軽平野地域の縄文時代晩期後半から弥生時代中期中葉の遺跡から出土した剥片石器全器種を対象に、接合資料の観察と、石器の作り方に関連する属性を分析することで石器製作技術を復元し、集落内における石材消費技術を明らかにする。また、石材をどこから獲得したのかを明らかにするため、石材環境調査を津軽平野南部地域でおこなう。津軽平野地域での石材消費戦略を相対化させて評価するため、比較対象として東北地域では日本海沿岸地域と下北半島地域、列島各地での比較対象として仙台平野地域と関東平野地域、近畿地域を取り上げ、各地の水稻農耕導入期における石材消費戦略との比較によって津軽平野地域における石材消費戦略の変化を相対化する。

上記の手法で分析をおこなった結果、津軽平野地域では、一貫して頁岩を主体に石器素材として利用していた。縄文時代晩期後半では岩木山麓西部地域産と推定される原石と、白神山地東部地域で製作されたと推定される5cm以上の大形剥片を獲得・消費したが、弥生時代中期前葉には直接獲得されたと考えられる6cm前後の頁岩原石や分割された剥片素材を節約的に消費するようになった。平野部へと進出し大規模な水稻農耕を開始した弥生時代中期中葉では、集落近傍の平川流域産頁岩原石を主体に浪費的に消費するように変化したことが明らかとなった。一方、頁岩以外の石材は、日本海沿岸地域産の黒曜石と玉髓を主体に用いていたが、水稻農耕の導入や規模拡大に伴い利用率が低下し、集落内での製作痕跡が希薄となり、弥生時代中期中葉には平川流域産の火成岩を利用するようになった。このような石材資源消費技術の変化は、水稻農耕の拡大や津軽平野地域全域で進行した平野部への集住化、集落立地の変化によって、日常利用する資源の獲得領域が縮小した結果であると解釈した。

日本海沿岸地域や下北半島地域では、一貫して集落から5km圏内で獲得できる豊富な頁岩原石を利用していた。仙台平野地域や関東平野地域、近畿地方では、水稻農耕の導入によって石材資源の獲得領域が縮小するという共通性が認められた一方、磨製石器の製作に剥片石器製作が組み込まれる場合があり、他集団を介して石材資源を獲得するようになるという差異が認められた。他地域との比較によって、津軽平野地域における石材消費戦略とは、独立した剥片石器の技術構造や石材資源の直接獲得が一貫しておこなわれ、水稻農耕の導入を契機とした生業・居住形態の変化によって、石材資源の獲得・消費戦略も連動して転換させた結果形成されたと評価した。